
王道マリオネット

カタルキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王道マリオネット

【Nコード】

N0843I

【作者名】

カタルキ

【あらすじ】

*ありきたりな設定で、ありがちな異世界ものが特攻します*友人的変人奇人は言っていた、異世界へ行つてくると。紅葉は懸念を抱く、もしやなパターンで、案の定な物語。(ひたすら邪道へ向かっている気がする今日この頃

00 戒 祭前（前書き）

はじめまして、始めました。

- ・月1～2程度の更新を予定としています。
- ・まだまだ慣れないところがありますが、こんなのでよろしければ見てやってください。

00 戒 祭前

突然だが俺の友人には『ヘンタイ』がいる。

…いや、こう言ってしまうと少々問題があるだろうか…。

訂正しよう……。俺の友人には『変人』がいる！

* * *

いつものフツー通りの授業が始まった。

俺はやはりフツー通り、フツーに教科書参考書類一式を並べ、これまたフツーに昼寝をしていた。

五時限目というのは学生にとって魔の時間である。腹は減ってないし、授業中特有の張りつめた緊張感というのも、すっかり昼休み君が拭い去ってくださるのだ。

そしてそんな時間に限り、古典やら地理やらの文系教科が入っている。

するともうこれは、「どーぞどーぞお眠りあそばせ」と暗に言われているようにしか思えないわけで。

（グッバイ…オールドジャパニーズ……）

せわしない現実世界^{リアル}に別れを告げ、至高なる夢世界へ足を踏み入れようとした俺は、

「——のぎゃあつ、ふぐわつはあつ!!」

変人の奇声によって引き止められることとなった。

俺を含め、クラスのまどろみかけていた面々が、ガバリと起き上がる。

「うっさいわ!このボケえ!!」

数にしてクラスの半数が、一字一句たがえることなく合唱した。それも反射的に。

俺はその一矢乱れぬ様に悲しき日々の積み重ねを実感する。ああ、悲しきや。

クラス中から発せられる殺気。その矛先は一転へと向かい、ゴゴゴーと渦巻いている。目を凝らせば霊能力とか特殊才能とは一切無縁な俺でも、きつと黒いオーラを確認できることだろう。

睡眠妨害犯はしばらくボケつと周囲を見回していたが、やがて、初めて自分がいる場所を認識したかのように、手をポンと打つ。

「おお…」

その後、いつものように嵐が巻き起こったのは言うまでもない。

「……青空だなあ」

校門を抜けると、変人がぽつりとつぶやいた。

「なんだよいきなり……」

急にしんみりとした友人に俺は苦笑する。

奇人変人なくせして、時に詩人めいたり風流になったりするところ、この友人最大の謎である。

「いや、なに。久方ぶりにこんなきれいな空を見たのだよ。少しぐらい感動を覚えてもいいのではないか？」

「久方つて、ここのところずっと晴れてるだろ？ 青空なんかいくらでも見られたんじゃないか？」

妙に達観した様子の友人であつたが、俺の一言にうつと目に見えて動揺を浮かべた。目をあらぬ方向へ泳がせている。

「……まあ、よ、よいではないか。はっ、さてはお主……自分に風流を感じる才能がないから我を妬んでいるのだな。まったく仕方のない奴め、さしあたっては我が直々に風流心を教えてやらんでもないぞ。なんせわが友人たつての——おい、コウよ……」

「ん？ なんだい自称俺の友人な変人よ」

「お前は止め際というものを知らないのか？ せめて、『あー、空が青いな』とか、『はいはい、ところで——』的なリアクションを

とるとか」

「もしかして、それを期待してたのか？」

「……………」

自ら進んで『長話のせいで空気にされるカワイソーな人』になろうとする、変人がここにいた。俺たちの間に冷たい風が吹き込む。

「——おっほん、突然だが一週間蒸発しようかな、と考えている」

「お前の突然は前後の会話を超越しすぎているな」

「しゃーらっぷ！ 止めても無駄だぞ、なんせオレは——

聞いて驚け、異世界に飛ばされてくるのだあっ！！ ぐわっ」

とりあえず、憎たらしいその跳ねっ毛へ正義の鉄槌を送ってみた。頭を抱えて呻く変人へ俺はぬるま湯のごとき視線を投げる。

「なあ、お前がそんなだから、無畜無害な俺がどれだけ被害を被っているか知ってるか？ おかげさまですっかり『同類』扱いだよ？ リカバリー不可能だよ？」

さあ、もう一度言ってみよう。

「………… いせかつ」

「ぐっばい、マイ・フレンド。君のことは一分以内に忘れるよ…………」

* * *

—— もそもそもそもそ。

「なあ、変人」

「ん、なんだい友人」

「これはいつたい何の修行だ？」

所変わって、何の変哲もない公園。俺とあいつはブランコに座って焼き芋を食らうという暴挙に出た。はた目から見ると、高校生男子が仲良く並んで芋食ってる図の出来上がりだ。

いや、クラスの女子生徒となら分かるよ？　なんで野郎と一緒に焼き芋食わされてるんだ？

「ふつ、説明しよう！　人々に俺と一緒にいたという事実を刻み込み、いまさら切っても切れぬ仲であることを自覚してもらっ」

「自覚はしてるんだよ、どアホッ！」

「うな——！　オレの芋がああああ！　おのれ、三百四十六円の恨みい」

「はあ、なんかお前のハイテンションに付き合ってるの、ばかばかりになってきた……」

—— もそもそもそもそもそもそ。

紅葉輝く秋の公園。夕刻なだけあってか人の影はほとんどない。

急に変人が押し黙った。違和感を感じて俺はちらりと変人を一瞥する。

あいつは、夕空を見上げていた。これまでとは打って変わって無機質に。

その豹変ぶりに戸惑いを隠せなかったが、何より……、

「いいもんだよなあ、『人』って」

あいつは夕空すら透かしてもっと遠くを、覗き込んでいるかのよう。

「見てて面白い喋れる、なにより反応がある。まったく素晴らし
いよ……」

俺、紅葉こうもみの自称友人——義秋よしあきは嘲笑を自らに張り付けていた。

「と、いうわけで！ 異世界に行ってくる！」

「まだ言っかつ!」

00戒 祭前（後書き）

予告？

義秋： 次！ 飛びますっ！

紅葉： 飛ばされまーす…。

01 戒 祭始

俺の身に不幸が降りかかったとき、とりあえず変人よしあきのせいにしておく。なぜなら……たいがいの黒幕はあいつだからだ。

そう、あいつはいつも俺にとって、憎むべきものだった。

帰り際に猿の大群に追われたのも！ 体は成人男性、心は乙女な方々に追っかけまわされたのも！ すべてあいつが丁寧に裏工作をしてやった。

だのにだのに、被害者である俺は、はた目から見ると共犯者として映るらしく、毎度の如く二次災害をこうむってきた！

本人は必死に変人の暴挙を止めようとしているのに、あの扱いは何であろうか……。

だから、大丈夫だ。この状況はあいつのせいにしても。

というか絶対あいつが関わってる！ 「異世界にいつてくるー」なんて言っただけだったのは忘れるはずもない、つい昨日のことである。

この理不尽に対する憤りをいつたいどこへ向ければいいのか……。

「あんのお、アホ変人ーっ！！」

とりあえず、はるか下に広がる大地に向かって叫んでみた。

* * *

時はしばし遡る。

「いつてきまーすつ、と」

返事も待たず、後ろ手にドアを閉めた。家の表札を通り過ぎたところで、黒々とした雲が俺の視界に映り、顔をしかめた。

降ってくるのかもしれない……。傘は…、先日義秋が骨にしていた気がする。

潔く降らないうちにたどりつくのが賢明だろう。

俺は軽く体をほぐすと、ジョギングの要領で走り始めた。

まだ大して経たないうちに、あいつの家の正面を通過する。

それにしても義秋の奴…昨日の宣言道理「異世界」とやらへ旅立ったのだろうか。いつもならここで「よう」と示し合わせたかのように出てくるのだが、今日はその気配もない。

別に異世界宣言を信じているわけでもないが、何にせよ、

「平和な一日だ…」

もしもこの日が俺を憐れんで下さった神様の贈り物だとしたら、なんと最高のプレゼントであろうか。感謝してもしきれない。

「ありがとう！ 神さま！」

ああ、頭上でひしめいている雲ですら美しく感じる今日この頃。

じゃあな、グッバイ・ヨシアキ！

「訂正する。そんなに俺が憎いのか神様！ サイテーだ！！」

空から飛来する大粒の雨。秋だから降ってもせいぜい小ぶりだろうという、俺の甘い考えを打ち砕いてなお降り注ぐ。

最初に通る雨と思いこんでいたのも敗因だ。ニュースなんて見ない主義である俺は、台風が接近していたという事実を知る由もなかった。

当然、俺は全力疾走。早朝の、のどかな雰囲気はどこへやら。

「まさか、義秋の呪いか…？ 落雷実験とやらで傘を丸焼きにしたのも、これを想定していたのか。くそう、なんて奴だ……」

誤解がないように言うておくが、このときの俺は突然の敵襲おおもめに正常なる思考判断能力を失っていたのである。けっして普段から「呪い」なんてものを考えているわけではない。

そんなこんなで、学校まであと少しとなった。先に見える曲がり角を右へ行けば百メートルもないはずだ。

俺は一気にラストスパートをかけて、角を曲がった。

そう、確かに曲がったんだ。でも……。

雨が上がった。耳の奥に余韻をのこしてあたりは静けさを取り戻す。

そりゃ、雨だし、永遠に降り続くなんてあり得ない。でもこれは降りやんだと言っているのか……？

「……へっ？」

雨どころか、周囲も少々変だ。いや、少々というには語弊があるか。

訂正。学校や住宅街がどこかへ消えました。そこにあるのは夕焼けが赤く染めてるススキ野です。

あまりのことに、自信喪失ならぬ自身喪失してしまう俺。あー、風が涼しいなとか、わけのわからんことを考えてしまう。

驚いことに、驚き過ぎたからか、人間って意外と冷静に対応ができるらしい……。

——キエエエエエエエエ。

そんな俺の心の声に賛同してくれたのか、空から奇声が返ってきた。

……はい……？ 空？

一拍遅れて、夕焼け色の赤い空を仰ぎ見た俺の目に……。鋭い爪、猛禽独特の研ぎ澄まされた嘴を併せ持つ立派な体格が映る。

こうして、獲物を狙って降下してきた巨大鳥とご対面した。

* * *

で、今に至る。

父さん母さん、ついに息子はやりました。人類が長い歴史をかけて作り上げた飛行技術を何の機械も使わずに体感しております。

そして父さん母さん、今までありがとうございました。息子は上にいる鳥やローの胃袋へと消えそうです。

ああ、本当に報われない人生だった。

はあ、とため息をつき、俺の両肩をがっちりつかんで悠々飛行中の巨鳥を見やる。

その体軀は信じられないほど大きい。くちばしだけでも俺の胴体ほどあるのだから、体の大きさは俺の四、五倍あるだろう。そこへ翼の大きさを加えるとなると、とんでもない怪物としか言えない。

夕日に照らされたその影は、はるか下に広がる地上へ伸びていた。

地上は先ほどから全く変わり映えがしない。どこまで行っても野原野原野原――。

それにしても、捕獲後どれだけたったのだろう？ 日が傾いている割には、暗くなっている気がしないのでそれほど経過はしていないと思うのだが……。肩が鈍痛を訴え始めている。

そろそろ何とかこの状況を打破したいのだが、方法という方法が全く浮かんでこない。

いや、でも。いくら現状がわからないまま捕まっただとしても、一切抵抗なしつても生物としてどうなのだろうか……。それならダメ元で、

「えーと、放せー、ばか鳥ーい」

――パツ。

おっと、これは、もしかして…？ あれ……？

うん、肩は痛くなくなった。なくなった、け、どっ…！

「こおんの、バカトリイイイイイイ」

キャッチ・アンド・リリース！の精神は立派だがなら最初から捕まえんなよってのと逃がすなら逃がすでちつとは他人のことを考えようとかこれじゃポイ捨てに等しい行為でひー！

一直線に真つ逆さま。とんでもない風圧で髪が逆立っているだろうが今は気にしている余裕もなく、俺は真下の黒点へ向けて落ちて行った。

あれ、ちよつと待て、黒点？

原っぱの中に何百もの黒点がうごめいている。風の音とは違う、叫び声とか、パパーンって音が……。

「つて、戦場じゃん！！」

最初から皆無に等しかった生存率が絶望的に減少した。

そして、俺は戦場の真つただ中へ——堕ちた。

* * *

「…………朱樹^{しゆき}様、時間です」

側から静かな声がかかり、朱樹は目を開いた。

前に広がるのは風でさざ波が立つ草原、そしておよそ五百に届き
そつな敵勢。

——相手にとって不足はない。

朱樹は不敵な笑みを浮かべると、地に突き刺した大剣を引き抜いた。

「幕は、開いた。我らの聖戦を始める」

朱樹の後方、闘気を露わに控えていた百の戦士たちが時の声を張り上げる。

大剣の剣先を敵陣へ向け、天へ掲げる。

「食らいつくすぞ、同胞よ」

戦が始まった。両軍の銃砲に込められていた弾が放たれる。同時に朱樹は用意されていた馬に文字通り飛び乗り、その腹を蹴った。狙いはただ一点、敵将へ。

「朱樹様が先陣を切られた！ つづけえっ！」

將軍たちの声が風となる、いや、これは己の心か。久方ぶりの戦。湧き上がる高揚感が朱樹の世界を流している。

（約束は果たした、あとは『あいつ』のみ……）

さあ、共に楽しもうではないか！！

「来い！」

——求める声は世界へと染み込み、止められた時間が静かに胎動を始める。

「なあああああああ——！！」

衝撃が、大地がはぜ割れたかのような揺れが起きる。

いや、割れたのではない。落ちたのだ。

敵陣のそれもちょうど将が立っていたであろう当たりの地面が陥没していた。運がいいのか悪いのか、敵将はちゃっかり御存命で口をあんぐり、腰を抜かしている。

朱樹は満足げな笑みを浮かべた。

——大志を遂げよ……。

（ああ、十分心得ているさ……）

記憶の中から響いてくる声に、朱樹は肯定を示す。

「全軍、侵攻せよ！ 我らの魂を見せつけてやれ！」

朱樹の言葉を皮切りとして、呆然としている敵軍へ黒き人の波がなだれ込む。

「ひっ、ひいいい——」

へたり込んでいた敵将が、周囲の者たちを突き飛ばしながら脱兎の如く逃げ出した。それを見た敵兵たちは我先にとそのあとに続く。

「さすがは鵜陣の将…逃げ腰まで見事なものだ。ふん、まあこれであちらは終わったな…」

脇へ騎馬を並べた將軍の一人がつぶやいた。まあ、確かに将が逃げ出した軍など烏合の衆も同然。

「ああ、我らの目的も達せられた」

言いながら、朱樹は陥没地点へ寄せる。見事な円形に繰り下がったその中心に何やらぐったりとした少年が…伸びていた。

「たくっ、ずいぶんな間抜け面だな。この私がわざわざ出向いてやったというのに…」

苦笑交じりに呟かれた朱樹の言葉。だが、そこには隠しようもない喜色が浮かんでいた。

「ようやくだ、覇道を歩むその時が…」

朱樹は慣れた手つきで少年を担ぎ、愛馬の鞍へと引き上げた。

「撤収っ！」

馬を反転させ、城への道を進ませる。

これから紡いでいく物語に、心をはせつつ。

01 戒 祭始（後書き）

雑談

義秋： このゝ、飛行少年めっ！

紅葉： …否定はしない、ああ、しないともさっ！

義秋： そして、まさかの急展開…？

紅葉： 自分で言いつつ、なぜ疑問形なんだ？

義秋： ………次戒、まさかの最終話！？

紅葉： 嘘だあっ！！

く御清聴ありがとうございましたく

02 戒 祭城

——それ……、が……キミ……だ……。

なにか、聞こえた気がした。

——…ふび…だ…。過去…ら…。

なんだ？ 何を言ってるんだ？

光が洪水となり、押し寄せる。いくつもの映像が何らかの配列を作り、通り過ぎてゆく。

（……意味がわからん）

——なら、行け。

* * *

ガバリと、俺は文字通り飛び起きた。

（あれ、俺空中ダイブしてたんじゃない？）

目の前には一見豪華な部屋。左手には恐ろしいほど細やかに装飾された見える。

部屋の中が随分紅いなんて思っていたら、右手の壁だと思っていたのはすべて窓、夕方なのか赤い光が差し込んでいた。そして自分が寝かされていたベッドもよくよく見てみれば天蓋付きで、優に三人程度は寝れそうだ。なんという豪華のオンパレード。

「……天国？」

この言葉がこの部屋を表すのに一番適している気がする。

（いやあ、だって俺落下したし、もし奇跡的に助かったのだとしても全く痛みがないというのはどうかと……）

改めて自身の状況を確認めようと体を見回し、それに気づいた。

部屋に人がいた。正確には俺が身を起こしているベッドの横、ベッドにもたれかかって熟睡している青年がいた。

居るだけならいいのだが、なぜかそいつは俺の左手首らへんをガツチリ、ツメを立てるほど掴んでる。

「……俺にこの状況をどうしろと？」

たぶん彼はあれだ。不時着した俺を拾って介抱してくれた、心優しい方だ。

（あれでも、ここって天国だっけ？　じゃあ彼は神様天使様サマとか？　あはは、まっさかー）

さてどうしよう。

生憎と、俺はせつかく寝てるんだから起こさないなんて配慮は持ち合わせていない。

というか痛い。特にツメが刺さっている場所が。

しかもだんだん握力が強くなっている気がするのは俺だけ？ それともこれは善良な気持ちが生み出している心の痛みかい？

このまま気にせず二度寝とか無理。最終的にどこまで強くなるんだろとか確かめる勇気を俺は持っていない。

したがって。

「——のぎゃっ!」

殴ってみた（グーで）。

「うーん、まだ鈍痛が……。普通殴るか？ 久々に気持ちよく寝ている人物を……」

言えない。俺の場合変人しか起こしたことないから、フツーだなんて。

「そりゃ、すまなかったと思っているケド……」

（怖かったんです！ 特にそのツメっ！）

「しかも仮にも命の恩人に対して——」

「あ、じゃあやっぱり助けてもらったのか」

当たり前だ、そう言って相手は笑みを見せる。

「まさか降ってくるとは思わなかったけどな……」

素直に礼をいいかけて、相手の言葉にふと違和感を感じた。

「ん、どうかしたか？」

「いや、何でもない……」

「すごい違和感あるな、これ」

「そうか？ 私的にはなじんで見えるぞ」

目の前の人物から渡された衣服。もともと来ていた服は土色変形の見ても無残な状態であつたため、好意でもらいうけたのだが、どこの時代劇といった感じなのだ。

形は目の前の青年と似通っており、赤が主体となった配色がされている。和服のよりは幾分楽な気がするが、裾が長くて動きにくい。いつ布を踏みつけて転ぶか気が気ではない。

足もとに細心の注意を払いつつ、青年の後から部屋を出る。

「うわっ、広…」

外は廊下だった。ただしパツと見どこまで続いているのかわからない。

「城だからな…広さで言えば他の領地とは比べようもないほどあるらしいぞ」

「…城？ どの…？」

「どこって、牙^がの領地に決まっているだろう。窓から確認していないのか？」

そこに至るまでの精神的な余裕がなかった。そして俺が外を見たところでピタツと地名を言い当てられるとは思えない。

「牙の領地……」

（やっぱあれかな、ここって）

考え込む俺に、目の前の人物は怪訝そうな顔をしたが、やがてポンッと手を打った。

「忘れていた…。そういえばそうだったか、ふむ、なるほど……」

俺の顔をみて何やら自己完結している。しばらく悩んだそぶりを見せ、おもむろに口を開いた。

「牙の領地と聞いて何か分かることはあるか？」

「……全く」

「——そう、か」

一瞬、目の前の人物が落胆を浮かべた気がした。次の瞬間にはまた人の良さそうな笑みを浮かべていたのだが……。

「自己紹介がまだだったな、私は朱樹——一応、牙の領主をしている」

* * *

「えーと、朱樹……？」

領主と言っていたので「様」をつけるべきかどうか迷ったが、ど
のみちいまさらな気がしたのでそのまま使用した。罰せられたりし
ないよな……？

幸いにして相手も別に気にしていないのか、ニコニコと答える。

「何だい、紅葉」

「ここを通れと……？」

目の前には存在感あふれ出る「門」。

城の中なのになぜ門があるんだとか、ここまでの造りは東洋風だったのになぜ門だけ西洋風なんだとかの突っ込みはさておき、問題はその奥。

「異様なにおいと、金切り声が漂ってくるんだけど……」

「気のせい、気のせい」

「黒い部屋と黒い人たちと黒い鍋と黒々とした染みがあるんだけど」

「見間違いさっ！」

「……帰っていいか？」

なぜだろう、ものすごくいやな予感がある。

そして現在、朱樹が浮かべている笑顔。それを見ると否応もなく友人な変人を思い起こさせるのだが……。

回れ右をしようとした俺の肩を朱樹がガシッとつかんだ。

「いやいや、入るくらい、いいじゃないか」

その笑顔の奥に潜んだ黒々とした素顔をのぞかせ、朱樹はぎりぎりと力を加えてくる。しかし、こいつの握力は無限大か！？

だが、間違いない。こいつは……、

（あの変人と同類だ！）

知らない大地でようやくあの変人の魔の手から逃れられたと思っていたのに、どうして変人奇人と巡り合ってしまったのか、俺はどなたかに尋ねたい。

というか、もうそういう星の下に生まれてしまったとしたか思えない。

「では、行ってみようか」

「え？」

どんと、背を押され、俺はよろめきながらも地獄の門をくぐってしまった。

ガッシャーんと、無情にも門が閉められる音がする。

「なあっ！！」

「すまない、ここに入るのは私もごめんなんだ。尊い犠牲に感謝するよ……じゃっ」

足音が遠ざかっていく。

それに混じって「あっはっはっは」なんて高笑いがするのは俺の気のせいかな？

（しかも犠牲って、ハッキリ言いやがったあんりゃろ）

俺は、朱樹に対する敬いの変人並みに低下していくのを感じながら、こぶしを握りしめた。

「お取り込み中、失礼しますよ?」

「はい!？」

突然背後からかけられた声に、俺は反射的に門まで後ずさった。

そこにいたのは、顔立ちの整った、ロングヘアーな……男?

「すみません、そこまで驚かせてしまうとは思いませんでした」

ばつの悪そうに言っているが……。そこまでってことは、驚かせることは前提だったのか!?

「純粋な悪意からでして、気配まで消しちゃいました」

(確信犯かよ!!)

「ワタシは礼蛇^{れいだ}という者です。以後お見知り置きを……」

なんか、あんまりよろしくされたくない人というのが第一印象だった。

「いやあ、驚きました。まったく領主様にも困ったものです、いきなりやってきて『頼んだぞ』ですよ、こちらも年中暇で忙しいというのに……少しは人の事情も考えてもらいたいもんです」

「はあ」

「いい領主様なのですが、人使いが荒いんですよ。ある意味使い方がうまいとも言えますがね……」

「へえー」

「ああ、でも月給は他の領地の倍はありますからね……いい具合にっり合いがとれてるんでしょうか。そう考えるとワタシもいい稼ぎしていますよね」

「あの……」

「なんででしょう?」

「どこまで行くんでしょうか?」

礼蛇と名乗った、一見物腰の柔らかそうな人に案内され、乱雑に置かれていた怪しげな物の間を縫うように歩いていた。すでに時間の感覚は失われている。

「あと少しですよ……」

礼蛇はニコニコと、どこかで見たことのある笑顔を浮かべている。

まさか、少しっていうのは、発音が同じだけで実は「まだまだ」という意味合いを持つのではないか…。

本気で考え始めた俺がいた。

* * *

「すまない、少々遅れた」

朱樹は言いながら腰掛ける。部屋の中には二人の人物がいた。どちらも朱樹の両腕とされる腹心の部下だ。

「気にはしていない。それよりも……」

「ええ、手短に是か否かでお答え願います」

重々しい空気をまとう二人に朱樹は苦笑を浮かべたが、すぐにその雰囲気を一変させた。

「否」だ。本当に残念ながら……」

軽やかな口調で言っているが、朱樹の眼は真剣そのものであった。対する二人が息を呑む。

「わかっているのか？ 時間はもう残されていないんだぞ？」

「……すでに鵜の領地は再戦の手筈を、遠方にある兎の領地も動き始めたとの報告が入っています」

「ああ、それは聞いている。ずいぶん気合いが入っているそうじゃないか、ご苦労なことだ」

「では『あれ』無しに、どうすると!?!」

朱樹はこらえきれなくなった將軍を片手で制した。

「まあ、そう一人で盛り上がるな。打つ手なしというわけではないのだから」

「それは、いったいどういう……我が牙の領の兵力は二領の勢力にとても太刀打ちできませんぞ」

「痛いほど、分かっている。だが、私は一言も『使えない』とは言っていないぞ?」

二人は、今度こそ驚愕に目を見開いた。

「無謀なのは承知しているが、黙って食われるわけにもいかないだろう? もしかしたら、‘是’となるかもしれない」

「儚き望みに希望を抱けと……?」

「いや、もつとだ」

朱樹は笑む。人々を統べる領主として、契約に従う者として。

「私は命を賭けろと言っている」

＊ ＊ ＊

「これって……」

急に目の前が開けたと思った瞬間、そこには湖畔が広がっていた。人工的なものなのか、その淵は正確にゆったりとした円を描いている。

オドロオドロしい部屋を抜けてきた俺には眩しすぎるほど、その部屋は輝いている。

一瞬外へ抜け出たのかと思ったほどだ。

「水が、光ってる？」

波打つ水面から溢れんばかりに光が飛び出し、ドームのように覆った壁を七色に光らせていた。光る湖と虹の壁…、何というか幻想的だ。

「すばらしいでしょう？　ここが我らの研究地であり、聖域兼神殿です」

——曰く、我らが領地に恩恵を与えし女神からいただいた至高の地、なり。

「ついでにこの水にはありがたいご利益がありまして。老後の生活充実、関節痛の改善、血行促進、縁解きなど……」

「までまで！　今なんかありがたくないのが紛れてたぞ！！」

「特に最後の効能は若い娘たちの間で大人気だったりします。おかげさまで、ずいぶん懷が温くなりました」

（さらにぼったくりかよ！　仮にも神様のおひざ元と言ってなかったか！？）

「——なあ、バチとか当たったりしないわけ……」

「大丈夫です。神前で、『全責任は領主様にあります』と進言していますから。ワタクシ共神官は全く心配ありません」

イケナイことを聞いてしまった。

（だから朱樹^{あいつ}は来るのを嫌がってたのか…？）

こんなのがいたら確かに…同情に価する。見目麗しい美人であるにもかかわらず、人をからかうことが使命ですとでも言いたげな言動をしてくるのだ。毎日、顔を合わせるようなことにでもなればさぞや悲惨な日々を過ごしそうだ。

（領主っていうのも大変なんだな……）

だが俺は、このとき重大なことを失念していた。

そう、何故朱樹が俺を連れてきたのかという事実を。

「という」ことで、明日から神官見習いとなつていただきます」

「……………はい？」

「明日から神官見習いとなつていただきます」

聞き間違いではないようだ。残念ながら。

「ということで明日の『朝』、起きたらこの服を着用の上、神殿のほうまで来てください」

なんか白い服を取り出しながらニコニコ……。ああ、出たよ営業スマイル…。

「当然ながらこの領主様に世話になっている以上、拒否権はありません」

———それに、避けられない運命ですから———

02戒 祭城（後書き）

ついでの話

礼蛇： と、上のセリフで脅しておいてくれと、領主様から頼まれます…。

紅葉： なにつー！

礼蛇： 責任転嫁とは…、領主様も困ったもんです。

紅葉： （いや、あんたも言える立場じゃ……）

〈前戒のは「嘘だー」… BY 義秋〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0843i/>

王道マリオネット

2010年10月10日06時28分発行